

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo.10（2013年4月号）◆

新年度が始まりましたが、いかがお過ごしでしょうか。今年は桜があつという間に咲いてしまい、お花見をしないうちに春が来てしまったという方も多いかもかもしれません。さて、4月末の20世紀メディア研究会頃には、『Intelligence』13号が皆様のお手元に届けられる運びになるかと思えます。ナンシー・スノー氏以下の論考をぜひご精読下さい。なお、購読を継続されている会員の中で9月からの新年度の会費を納入されていない方は、お早めにお納めいただきますようお願い申し上げます。また、次の14号の投稿原稿は、今年9月末が締切です。皆様の優れた論文をお待ちしております。このニュースレターも今回で10号目となりましたが、今後も「Intelligence」会員専用ウェブサイトとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【第74回20世紀メディア研究会】（3月30日午後2時半～5時半）

・藤田篤子「吉屋信子－再版戦前作品の占領下における改変の問題」：戦前戦中戦後を通して活躍した作家である吉屋信子の通俗長編小説77作品を対象に、戦前戦中に書かれた作品が、GHQ/SCAPの検閲期にどのように改変されたのかを、詳細に検討し、具体的な異同を指摘するとともに、それが占領軍による検閲なのか、編集者による改変なのか、あるいは作家自身による改変なのか、問題提起した。

・志村三代子「冷戦時代の「日米合作映画」－『サヨナラ』（1957）をめぐって」：1957年に制作された『サヨナラ』は、日本人の役者がハリウッド映画に出演するという形の「日米合作映画」で日本通にも評判が良かった作品だが、朝鮮戦争のヒーローである米軍兵士と歌劇団のトップスターある日本人女性の恋愛結婚をめぐる物語に見られる人種や性別、日本文化や恋愛などに関する描かれ方を、映像を一部上映しながら分析した。

・吉田則昭「戦後における「中野正剛」再考－反軍・革新のシンボルと語られたイメージ」：緒方竹虎の親友でもあった中野正剛が、戦後においてどのように語られてきたのかを、関係者の回想、研究書、論文、宣伝ビラなどから探り、中野正剛のイメージが戦後に、反東條としての「抵抗」とファシズムによる「翼賛」という二つの側面で作られてきた事を各種文献を整理しながら論じた。

※なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html>

（閲覧は『Intelligence』の購読会員に限定されています。）

●次回の20世紀メディア研究会は4月27日(土)午後2時半から、前島志保、小野耕世、川崎賢子の三氏をご報告の予定です。5月は25日(土)、6月は29日(土)の予定です。また、ご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【今月のコラム—気になる新著】 [敬称略]

最近出版された検閲と諜報に関する英語文献をご紹介します。検閲関係では、日本に関する本が二つ出版された。ジョナサン・アベル(Jonathan E.Abel)『改訂—戦前・戦中・戦後の日本における検閲文書』(*Redacted – the archives of censorship in Transwar Japan*, University of California Press)で、関東大震災から占領期までの間の日本の発禁検閲文書に関する研究で、雑誌『改造』における削除や検閲官に関する表現など、検閲の複雑な過程に分け入った書。もう一つは、キルステン・キャザー(Kirsten Cather)『戦後日本における検閲芸術』(*The Art of Censorship in Postwar Japan*, University of Hawaii Press)は、有名なチャタレー裁判から、2004年漫画「蜜室」裁判まで、主に性表現に関する出版物や映画に対する規制を論じたもの。

一方、諜報関係では、クリストファー・モラン(Christopher R.Moran)とクリストファー・マーフィー(Christopher J. Murphy)による共編著『英国と米国におけるインテリジェンス研究—1945年以降の歴史』(*Intelligence Studies in Britain and the US-Historiography since 1945*, Edinburgh University Press)が、CIA やその他の情報機関に関する研究が米英でどのように進展してきたかをまとめた本で興味深い。

[4月15日付文責：土屋礼子]